

『発刊の辞』

ただキリストのみが

聞かれなければならぬ

(*Christus solus audiendus est*)

丸 山 忠 孝

ここに小誌『基督神学』を讀者に問うにあたり、標題のモットーに託して、その使命の一端を紹介させていたたく。神学の基礎は神の啓示である聖書であり、聖書の目標(スコープ)はイエス・キリストである。使徒パウロにとつて、啓示は「神のご計画の全体」を明らかにし、その目標は、また「主イエスから受けた、神の恵みの福音」(使徒二〇・二四、二七)に外ならなかつた。誤りの無い神のことが、聖書に基づく神学の営み全体を通して、キリストを指し示し、輝かせること、これが『基督神学』の目標である。

(一)

プロテスタント宗教改革は、その形式原理「ただ聖書のみ」に見るように、規範的權威を有するものとしての聖書を教会に回復する運動であつた。しかし、その聖書の權威は、神の靈感により書き下された書物としての權威であるのみならず、啓示の主体であり、また、その書物の目標であるイエス・キリストに基礎を置くものであつた。

宗教改革者マルチン・ルターにとり、一五二二年、聖書学において神学博士号(*doctor in biblia*)を取得したことは決定的な意味を有した。これ以降の彼の生涯は、神のことばのために、神のことばに生き、神のことばを教

会に教える務めであった。「塔の経験」を通して到達した信仰義認の教理、すなわちプロテスタント宗教改革の實質原理も、神のことばとの彼の取り組みの成果と言える。

そのルターにとつて、神のことばとは、第一義的に三位一体の第二人格、キリストであった。確かに、神のことばは書かれた聖書であり、また、語られた説教者のことばであった。しかし、何よりもそれは聖書や説教を通して語りかけるキリストであった。この意味で、聖書の目標はキリストであり、そのキリスト認識無しに聖書を持つ者は、聖書を持たない者に等しい。というのも、聖書が正しく解釈されるならば、それはキリスト以外のものを含まないからである。①彼が直面した、自他共に認めた最大の論客、エラスムスの聖書解釈に対して彼が投げかけた問は、聖書に対する彼の基本的姿勢を明らかにしている。

「聖書からキリストを取り除いてみよ、ほかに何が残っているというのか」②

(二)

ハインリヒ・ブリンガーは、ルターの著作に親しみ、チューリヒの改革者ツヴィングリの説教を聞いてプロテスタント信仰に導かれた。そして、ツヴィングリの死後、チューリヒ教会改革を指導した。

ブリンガーの聖書観の特徴は、聖書の全体を神と人との間に交わされた唯一、かつ永遠の契約に対する証言と理解することであった。彼のユニークな、一五三四年の著作『唯一、永遠の神の遺言、あるいは契約について』(De testamento seu foedere Dei unico et aeterno)は、この点を明らかにしている。アダムから、アブラハム、モーセ、ダビデを経てキリストに至り、またキリストから、教会史を経て最後の審判に至る救いの歴史が、この唯一、永遠の契約の展開とされた。もちろん、この歴史の中心はキリストである。③

さらに、ブリンガーは聖書をキリスト論に基礎づけ、聖書全体の目的 (finis) をイエス・キリストとした。④また、キリストが聖書のねらい、あるいは目標 (scopus) であるとも言つ。この理解によれば、キリストに対する証言で

ある旧約聖書の目標も、また旧約聖書の正しい解釈者もキリストである。したがって、山上の変貌の場面における天来の声が、「これは、わたしの愛する子……彼に聞きなさい」(マタイ十七・五)としたように、キリストに聞くことなしに、聖書の正しい解釈も無いことになる。つまり、聖書、あるいは神学に対する姿勢は一言に要約される。

「ただキリストのみが聞かれなければならぬ」(Christus solus audiendus est)⑤

### (三)

第二世代の改革者ジャン・カルヴァンはルター神学を客観的に評価した者であり、またプリンガーとの長年の親交でも知られた。ジュネーヴ市の教会改革のみならず、プロテスタント宗教改革の前進に貢献した。

カルヴァンの聖書論は、主著『基督教綱要』にその基本構造を提供した神認識論の脈絡において理解されるべきであろう。すなわち、創造主なる神認識と贖い主なる神認識との関連において、啓示、聖書の来歴性、靈感、権威などが論じられている。⑥

まず、創造主としての神認識は、一部、被造世界である自然に、そして決定的には啓示としての聖書に由来している。いずれも我々を神認識に導くものとして、自然は「もの言わぬ教師たち」、また、聖書は「教師」(magistra 女性名詞)と呼ばれている。しかし、究極的には創造主を我々に父として指し示す教師 (magister 男性名詞)はキリストである。共観福音書の注解(マタイ十七・五)においても、天来の声が「教会におけるすべての権威を身に帯びた教師 (doctor)」としてキリストを指し示し、また、教会を「唯一の教師であるキリストの口にのみ頼るよう」招いている、としている。⑦

カルヴァンによれば、聖書とキリストとの関係は、啓示とその啓示の仲介者であると同時に目標であるものとの関係である。旧約と新約、創造と贖いとを結びつけるものが、聖書の目標としてのキリストなのである。⑧

さらに、聖書の目標を我々に明らかに示す働きが聖霊の内的証言あるいは照明である。聖書が読まれ、説教が聞

かれる際、それらと共に聖霊は働いて我々にキリストを指し示す。この点を例証するため、カルヴァンは「文字は殺し、御霊は生かす」(Ⅱコリント三・六)を引用する。「殺す文字」としての聖書は、聖霊の内的働きを抜きにしては、心に感動をもたらし、ただ、耳に響くにすぎない。しかし、

「もし、(文字が)御霊によって心のうちに力強く刻みつけられ、キリストを差し出すならば、それはいのちのこゝろである……(si Christum exhibet: verbum est vitae …)」<sup>⑧</sup>

次に、贖い主としての神認識は、キリストにおいて啓示された神を、神のこゝろを通して、我々の信仰によって認識することである。それゆえ、キリストは「信仰の目標 (scopus fidei)」と呼ばれる。そして、信仰の源泉である神のこゝろと信仰との間に存在する密接で、恒久的な関係は、太陽とその光線との関係として表現されている。<sup>⑨</sup>

「信仰がその向かわなくてはならないまゝ (scopus) から、もしわすかでもそれるとするならば、それはもはや信仰としての性格を保たなくなり……」とカルヴァンが言う場合の「まゝ」とは、あるいは、「みこゝろ (verbum) を取り去ってみよ。そこにはもはや信仰は残らないのである」<sup>⑩</sup>という場合の「みこゝろ」とは、究極的にはキリストに外ならない。

#### (四)

テオドール・ド・ベーズ(ベザ)はカルヴァンの後継者であり、ジュネーヴ大学の初代学長でもあった。一五六四年のカルヴァンの死以降、数十年にわたりリフォームド教会運動を広く指導し、正統主義神学の基礎を築いた。

この時代を反映してか、ベーズの聖書論は聖書の正しい理解(正統性)と正しい適用(実践性)双方を強調する。彼はいう、

「我々はキリスト教会を学校と言う。そこでは、主のみこゝろが書かれた聖書から反復されるだけではなく、それが正しく理解され、またそれにより公私にわたる奨励、矯正、慰安が実施されるように教えられる」<sup>⑪</sup>

教会の信仰と実践における教科書として、聖書を靜的に理解する傾向は否めない。

しかし、ベーズの聖書論の動的側面は「キリスト王国論」に顕著である。当時のキリスト教社会の理想を「靈的なキリストの王国」、すなわち、キリストがみことばをもって教会権と世俗権双方を靈的に統治する「みことば支配(Bibliocratia)」とした。そこでは、キリストは「唯一の立法者」、「教師」である。<sup>⑭</sup>

以上、ルターからベーズまでのプロテスタント聖書論の一面を追ってみた。一貫してそこに「ただキリストのみが聞かれる……」という。神学の営みの基礎また目標が明らかになる。

(注)

- ① WA (Werke: Kritische Gesamtausgabe, Weimar, 1883 ff), X, 1, 628.
  - ② ルター「奴隸的意志に對して」(1511年)『ルター著作集』第一集、七(一九六六年)一八頁。 WA, X Ⅲ, 606.
  - ③ O. Ritschl, Dogmengeschichte des Protestantismus, Bd. Ⅲ: die reformierte Theologie (1926), S. 413.
  - ④ Bullinger, Antithesis et compendium evangelicae et papisticae doctrinae (1551), p. 8.
  - ⑤ J. Staedtker, Die Theologie des jungen Bullinger (1962), S. 52-57.
  - ⑥ カルヴァン『キリスト教綱要』I・6～9' Ⅲ・2 参照。  
Cf. E. A. Dowe, Jr., The knowledge of God in Calvin's Theology (1952), pp. 86-90, 160ff. T. H. L. Parker, Calvin's
- Doctrine of the knowledge of God (1959).
- ⑦ 『キリスト教綱要』I・6・1° OS, vol. Ⅲ, p. 60f.
  - ⑧ CO, 45:488.
  - ⑨ K. Reuter, Das Grundverständnis der Theologie Calvins (1963), S. 131-2.
  - ⑩ 『キリスト教綱要』I・6・3° OS, Ⅲ, 84.
  - ⑪ 『キリスト教綱要』Ⅲ・2・9° OS, W, 13f.
  - ⑫ Ⅲ・4° OS, W, 14.
  - ⑬ Beza, De veris, ... notis (1579), p. 36. Cf. T. Maruyama, The Ecclesiology of Theodore Beza (1978), p. 167.
  - ⑭ Tractatus pius et moderatus (1590), p. 116: Epistolae theologicae (1573), p. 402 (T.T., Ⅲ, 307). Cf. Maruyama, ibid., pp. 117, 125.

【歴史神学・教義】